



7月



「あなたとわたしをつなぐ

架け橋をつくらう」

令和元年11月、「令和元年度 人権教育連続講座『イキイキ人間学』」が、ライフパーク倉敷で開催されました。フリーアナウンサーであり、「コーチング」をベースに研修やセミナーでコミュニケーション講師として活躍されている、おかやまアナウンス・ラボ株式会社 代表取締役 森田恵子先生に講演していただいた内容の後編をお届けします。

「同じ景色をもつ」

人の話を聞いてあげて自分も聞いてもらうという関係性をぜひやってほしいと思います。そのためにお伝えしていることは、相手の話を1回受け取るということです。この受け取るには「受容」とも言います。受容と聞くと、ものすごく難しいことをしなくてはいけないと思うかもしれませんが、単純に受け取るということでもいいです。しかし、賛同ではありません。賛成でもありません。同感とも違います。受け取るというのを、正しくご自分の中で理解をしていなかったら、受け取り方が違っ

ではないですかね。

(森田) 黒。

(A) 黒と白。

(森田) 黒と白。

(A) なんか、それから赤。

(森田) 赤？黒と白と赤？

(A) 小さいころにね、巣から落ちたヒナを育てたことがあるんです。

(森田) Aさんが？

(A) それがもう大きい口を開けて、餌を欲しがるのですよね。餌を

あげた思い出があるんですよね。その時は、赤だったですね。

(森田) 赤だったんですか？その子

大きくなってどんな感じになったんですか。

(A) それが、育て方が悪くて、ちよつと悲しいことになってしまいました。

(森田) 悲しいことがあったんですね。Aさんは、黒、白、赤もいたなっ

て思うんですね。そうなんですか。黒、白、赤か。へえー。

Aさんとの会話の中にとっても大きなポイントがありました。

では、もう一度やります。今度は、私の伝え方、聞き方によく注意して聞いてください。

(森田) カラスは、何色でしたっけ。

(A) カラスはね、おそろく、赤

だった。赤だったと思いますね。

(森田) 赤のほががないよ。Aさん。だって、カラスは、黒に決まっ

てるから。カラスは黒。あのね、赤なんてだれが言っとったん。カラス

は、黒ですよ。もう世界中見ても、カラスは黒。映画に出てくるカラス

は黒。赤はない。ないないないない。ないの。赤はないの。ないない。

(A) 僕のカラスは・・・

(森田) ないないない。僕のカラスはってそれ、大丈夫？どんな夢見

とったん。おかしいわ。Aさん。前からおかしいと思つとったんよ。

「カラスは何色ですか」という話

の中で、Aさんは、最初に黒、その後、白、赤と言ったので、私は一

瞬ドキッとしました。黒で止まると思つていたから。「これ何色？」と

聞いたら、私の中では黒だからAさんも黒と言うだろうと思つていま

したから。でも、Aさんは、黒に加えて赤も白も言いました。普通は、

「ちよつと、何それ。」と思います。

そこを言わないで、「えっ赤。えっ

白。なんで？」と聞いたから、A

さんの子どもの思い出のお話が出てきました。聞き手が、1回受

け取るから、Aさんのすべてが分



「チョッキン！」

水彩画

倉敷市立菅生小学校

2年 井ノ上 咲妃 (令和元年度)

大きく育った学級園のナス。みんなでカレーを作ったら、とってもおいしかったです。ナスと日に焼けた顔・腕の色を工夫しました。

かるわけではないけど、Aさんが持っている感性や子どものころに体験したことや見たという景色を一緒にもたせてもらうことができました。

「そういう背景があつて、だからそういうふうなふうに思うんだ。」というように同じ景色をもつことができず。しかし、受け取ることは、賛成ではありません。「そうそう、赤だよ。そうそう、カラスは白だよ。ね。知ってる、知ってる。白のカラスいた。」これは違います。こんなこと言うと、自分の気持ちに、かなりうそをつけてますよね。そうではなく、カラスの思い出を一緒にもたせてもらうという感じです。

もしAさんが「カラスは黒です。」と言い切ったとき、私は「カラスは白です。」と言おうと思つていました。そう言つた私に対してAさんはどう答えたでしょうね。みなさんはどう言うでしょう。

うか。「カラスは黒に決まってるが。」なんです。だって自分たちが見てきたものは、カラスは黒ですから。だけど、「カラスは白。」という子どもがいたときに、または大人がいたときに、多種多様な人たちがそう言ったときに、「カラスは白だった？ いやいや、そんなはずない。カラスは黒。黒。」と言うと、これは否定し遮ることになります。「カラスは白。カラスは白。」と繰り返すだけで受け取つたことになります。「カラスは白。」と受け止めると、もう堰を切つたように、「いや、なんか深山公園で見たのは白だった。」「それは本当にカラスだった？」というふうに一緒に思考を巡らす旅に出られるということ。それ間違え

とるわ。」と教えてあげることが先決ではなくて、カラスは白という情報と一緒に、相手の興味・関心をその瞬間に一緒にもつこと、同じ景色を見ようという気持ちを出すこと。それが受け取るということ。です。

でも、同じ景色を見ようとする。とは、賛同することとは違います。あなたが賛成だと思つたら賛成すればいいのです。後から、話を聞く聞き方のポイントは、「受け取りましょ

う。受容しましょう。聞きましょ。」ということ。です。

「あなたとわたしをつなぐもの」

相手の言っている言葉の背景は、その人しか分からないことですが、「同じ景色をもつ」ということは、1回その言葉の景色を見てみようというように受け取るということ。です。『見てみようかな』というところまでが受け取る作業です。「いや私とは違う景色だわ。」と思つたら、聞いた後に「あー、そうなん。あー、ただ私とは違う意見かなと思つた。」と言えればいいのです。

そのちよつとした順番という受け取る時間があるかないか、相手との関わり方が変わってきます。おそらく、お父さんお母さんとの、おじいちゃんおばあちゃんとの家庭内での会話や、地域でご近所さんたちとの会話というのが、そのままお子さんに伝わっていきます。親御さんたちの会話のリズムやパターンがそのまま子どもが学校でする会話につながります。例えば、「昨日、どここのスーパに行つて来て……。」「あつ。あそここのスーパ、僕も行ったことあるよ。あそこはなあ……。」こうやって話し始めると、話し手と

聞き手が変わっていることがありません。「子どもが余計な言葉をいっぱい覚えてきて困る。」というママたちがいます。そんな言葉を誰が教えるのでしょうか。大人です。教えるというよりは、大人の言葉を聞いていくのです。また、メディアの責任も大きいと思います。結局は大人です。子どもたちは、そこから吸収しているのです。

受け取るということを知らないまま、子どもさんたちが大きくなる可能性があります。受け取るという作業を、家族間でほんの少ししているだけで、その間合いや呼吸というのが、子どもさんたちにつながっていくと思えます。

「人を人として慮つて(おもんばかり)関わっていく。」ということとはどういうことなのか、というベースがないことには、何をやっても定着しないのかもしれない。そのベースになるものは、もしかしたら、この「受け取る」ということかもしれない。お一人お一人が、相手との関わりの中で、相手を受け取り、相手を否定せず、傾聴をしていくという、本当に些細な日常生活の取組から、大きな変化は生まれてくると私は信じています。(おわり)